三代記
大全

武徳鑑倉田記

五之巻

於
178
个

178
5

東京帝國大學文學部圖書

武德錄倉旧記巻之第五

目錄

一 鎌倉殿沛的始 并 城四郎長茂逆謀事

二 城四郎長茂が謀叛より伐て洛中騒動事

三 越後の早馬鎌倉に到 并 豊綱入道

四 資盛が討死に向ふ

佐々木中務重綱高入道然作れる

㊄ 鳥坂乃城軍佐々木小三郎兵衛尉盛季
海野小太郎幸氏等軍功の事

㊅ 佐々木盛季勇戦并菱沢四郎清親
戦名の事

武徳編年集成巻五之巻

㊀ 鎌倉殿沙汰始并城四郎長茂滅亡事

角て其年も暮れぬ。明まして正治三年正月十二日。鎌倉の沙汰始めそ。沙汰始とは。まつ手形を出。沙汰始まさしい。たをたまわり。頼朝とあげ名乗する。射られ者ども十人。弓場のたたかいとなる。御所の榛谷四郎重朝。小沢次郎重政。二宮八郎小太郎。安民佐々木小三郎盛季。三宮八郎三郎重隆。中郎太郎結城四郎長茂。三宮小次郎光義。和田平太流長門三郎新豊。和田彩名東射芸豊。の嫡子にて。太郎射義豊の嫡孫なり。みなく

てくるる精兵うて世にすぐれたる兵をえらびたてられ
るはこれをもれるに同さる日は清原の広綱命ありそ能の家
家。
登師と勅する。彩象に出師あり。事終て出る市衣を出す。
大とのわ豊原の親房。なをのわ豊大江の維房ふ。布施おとうけ
給て。見とをとりて。出の家ハ法眼兼暁の弟子にて紀伊国
の国ハ。家ら器の別当をうに補せらる。去ぬるとて日二月朔日。
始て神祇とうげ始さるれ。それよりすぐに清原の系巳大猪家
大江の家えといで。ゆれをうとてうれる。家に越後国の住人よ。城
四郎平れ長義といふ者。ゑい金丸わ家平の維義ら婿ふ出れ
乃城の介源義七代の後流なり。長義ら兄越後の守平の郎ふ
一味し。本者義仲を追伐せんとて兵を起せしあり。けるとも敗滅

しぬ。その時に四郎長義兄ら方をつきて本者と追討せんとあ。
合戦数度ふ及びしかたつ。本者ハ義ふ利と失ひぬ。平家いてくを
滅亡しぬ。長義ハ。源氏のうにしたがて。橋系平と系ふ石ゆけ
ら。ものうに年月ををくに。去ぬる文治四年九月。ゑ者房の侍
数定住といふ侍。紀列能野より。法ゑうに系向せらる。ゑい数
大夫ゆ数数ふの。武蔵ゆ人の市郎よ。丹後とたくせ。侍て行法
いらぎふしかに。ゑ者ハ数信しかる清うに。市郎面のうゆ招
ゑものうにより。てなりけ。長義ハ。定住を以て。年ハ師匠とせ。
定住とのうーみよりて。城の四郎ら能科と市郎免をさし。市郎
人に石へらを結ひるべしと頻よ執ーりさしにより。彩象に
許容ふしく。四郎ら能科ゆ免ゆて。石つらせ。へべしとて。

日吉丸は西の丸おさめ小立酒食のくぐ我もくと出仕をり。
たの一れ度い島山の城郭を太。右の一れ度い橋本平三郎好り
定住いこや光秀て来と。中屋敷中に入て。柳くの柳がらとと
らる。柳の城の門前毛利氏。小早川立烏帽子と名て来と
し。出仕の面く高山中入て毛利氏よりて。日と付る。その下け七
尺あまりにて眼さ巳まにさけ。色白く鼻ふく。大力剛勇
なるにいつくでも面めあるられる。毛利氏地をとる気色なく。立羅
食の法大石二郎左衛門尉兵衛尉ずんど色ついてよこだれり。
のさくとゆ。屋中とうしろにあそばくとして座して
あり。軽輩ハ屋中より出給ふそとくの武の名ハ。
定住もひあ氏みず。赤面してゆれ。ろ。河柳原ぞ。

ろ向ひ。ろ。ハ君の中座の間なる和と。基氏れの和なり。
いそださがれよくいハ毛利氏。ろ。て。天知軍門ふ。そ。やうて
座を立退出せり。ろ。ハ定住も。伊と執ーとべきゆくるふく。
又ものごく。常河が新ろて。教年とろりけるふに。常河法王
のかそ。ろ。ハ相列一の武れ婦ようを巳河毛氏も家河が。
逆ろよ与せ。常河新乃方へみげのがんとせて。彼
一部てぐそ滅亡に乃ひ。ーうべ。それろうあこれに俳個
し。回功備代の老ども。まくき集ま。日志のくるがくとお
慢し。謀叛と企。天下を乱ろ。さんとくこけるぞ。ろ。ハ
大和河内の国を。実かしこと溜約と。一族城ふ河原資氏
入道。日三郎資正。ろ。の原ふ。ハ。ひくにお集ろ。実ふ

又奥州の義家朝臣、義綱が末の子に、本吉の冠者源綱と云あり。兄義綱亡び給ふ後、人ゝ知て、配所よりかへらせ給ふ。義綱の方人よりて、京都へ新帰り給ふと、義家をしたがへ、源綱をそすゝめける。源綱、えゝ兄弟一族と、源氏よ貴こそれ。恐ゝ貴能よ色てさひしうばかりなれよさりと、仕びをもちひんして、配所にあげ給ふ。義家が兄、城越ねちの助、義家に、ふたゝび資盛と云りの。越ねの出羽よりは、すゝめ方へも、縁じ合を、近日源頼乃族とあげ、宮城天よ流をせんとおひ給てけるゝ。先頼よ恵び、のゝ。紀州乃浪宮と、ゞ結ゝんとぞ、ゝ、ゝる

二 城太義が係頼ゝ、源中将勅并逆流お深せる事

京都よ、正月廿七日、上土市門の浪。紀州乃中ゝ、二条殿へ勅願

いの事を、春長二七条の院に、一乃文も、同時まに、掃部頭、義家親族、乃伝ゝ、本方の射手、勅願ふ、ふたゝ、義家、勅仕とて、左京と、方けをゝ。義の子、冠ふ、左京、ゝ、ゝ、ゝ

名とる〜大剛の武士たち。すべからく武士なく。ゆゆしくと退れて門より外へ切てお一足もちるべからずと。大とらしておそうよ。
武家うるひ〜とやちひろん。中代さてゆげ行〜がそれらとぐん。
仏用の法師にまち。一用よ押入て。四方とけうあそれぐ〜
城武はも平れ武家とと考てい。扨も湯殿の軍勢。院宣とや
いつまう。神のまご富歓と称じ。事家と云〜天下と押領〜あ。
勅憲とうにあまる。そこ軍家。大ご遠と続て。悪とおいじ
ろふ〜方民とろ〜む。其横恵かぞ〜ろふいと。ねいはどつよく湯
食と奏云〜。天下の政道とりてのごく。君ふはうせきうにじ。
急ぎ軍家。徐代乃宣旨をおートさろ〜とぞ奏〜ける。伝用
も大〜にはそれ行〜ろうせ。ゆひ〜うた。てせ伊ふる義経。

退対の院宣と。押てゆ給乃にはよて。湯殿の横ろ。ぞ院ぞ〜ぐ
〜事。行いまぐ去ろ〜に。ひ〜ひ。ひもかまぐ武威に神それ。一ヒ乃
害とのぐれんぐ。ゆいつまて院宣と出ぬ。ひ〜ろ。ひ〜ろ。ひ〜ろ。
乃ぐべきと。湯殿の院宣とゆそれさせまひ。敢て勅許すしこべ。
武家も力なく。ぞにて。ゆ刑と。梅ゆべ。京都五畿の武士ゆ。弛
向んるとゆそれ。士卒ゆと。引具て行方ちこべ。落うせ乃。
ゆ〜ゆ伝〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。
とゆ〜た。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。
ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。
ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。

法師ハ京上ニ住ス。上彊会の人々我も〳〵と出而に絶集
祝ひ。彊会中上式ハ〻と経論を。和国古今射義豊。地白て制ニ
加へ。うば衆よ入て御静謐よるべくろ。門ナ二百余歳よ年号改え
宥て。正治元年と建仁元年と改ハ。城ニ帝を武ハ。新ほ四ハ。
まづ帝ハ四人をわ具ハ。宴四ハ。
おもく出家入ハ。て大和の国ニ行げんぐ。吉野の奥ニ出家入。
ふくかれてゆくろ。吉野の宮院おひうと。俗ハ出家ハ逐電
城の宮帝を打ち。彊会及ハ出家ハ。て新ん。門廿二日金剛徒
師を遣。綸旨の西行師。民部ハ。伝絶ハ下ハ式ハ。無俗ハ。
として弱る程よ人ハのぐべ。
逢ハ。ハ。業不感ハ我〻ハ。

我〻ハ切て。大内ハ。れと我〻ハ。大内
先ハ。ハ見て。人ハ。ハ。
京都よ。ハ。門廿四。
ハ。城の小次郎資忠。
城郭ハ。ハ。
ハ。京都ハ。門三郎資忠。
ハ。京都ハ。
ハ。ハ。
ハ。ハ。
ハ。

させよくいるまに、つぎとゝめをひ岳さうゝ。栗のごとく矢種すでに射盡せり。源家、源氏、源潮ホ、帝ホ、ホ、ホ、

いへばはなはだ後あるの由申人ふ却あて責戦とゝ人〻大浮世毎度
猶利を以て猶武こ振いりもと。ものだはしの事とかいつゝとぞ
けり。彼為ての和睦又ものこゝ内段。大佐ちまえ家ちまえ高人乃長
ハイト市かいまつ。相〻ハ徳紙とゝ。さらに。相ものゝ為しくらい浮
世一弧の遇勢とゝて。南部よ羽一。ちとゝくゝ大宝のつれめふ
ものこゝ。れ。ら叔又氏武すでに滅ぬ浮世と沫代せん事。
武をあぐ〻とぐゝびつそだはしとゝ。武面べ〻無猶金のとゝ。
の中にいぶれをう対しの大ねゝて義一つゝいんとのゝ面べ〻ちまえ
大乃若位とゝみお作のゝ。浮世ゝ。これの手為れ術世遂ん
と金ゝ。何行はゝ。ちとゝ仕おゝいべゝ。ちとれ面ものゝ
ゝ。ゝ。ゝ。

られいぐ。去ぬる頃上杉の面くいぱけまんてへ。ようつ
かうはじくい。そのゆへいうんくあれば所長吉地とて付
くつたを。武蔵国わくいぐ。義雲のうちにもうれは同ごと
や。老たるをそ。わこと上杉家の柳川むを西国
云方べくこのくれたら。何で一人をも。面系の武功ばらしいぐ。
とうくとをてはうるこ所の武功をぐれるふ流のくて伝付
らを。義雲れいくに。但南国のうちにい。ぬるべくくいぐ。作未
ゑ嫡附豊臣入乃面会。西伏上野の山。城沢のつよい也。それに
はさうくいぐとうくられいぐ。所改度えいて皆くそに同ぜうが。
去にうを。越後の山乃市郎人ゑ武右衛門。高坂上柳喜。城小左
衛門尉豊と。追付とぐくよ。市教書とをくるぐさう。所乃伝石

うくいぐ。和田右つ附義雲とあうと上野くまるとぐつうに
けるが。所乃市郎上列上。北条に北条作未ゑ系附義雲
ハ門れいこを。市人あにる武蔵をんれをくうが。
るるうを先ゑういぐ。ゆんくを行義とこなぐ。
市教をと行くくぐ門より面よ入るふ乃ぐと門のうをいぐそ
面うを。越後くと北て行。家れよ所ゑた大ゆ
ゆぐうを。義雲をうて打。越ハくと北て行。家れよ所ゑた大ゆ
ゆぐうを。義雲をうて打。越ハくと北て行。家れよ所ゑた大ゆ
ゆぐうを。和れれくぐるよ方よ。塗よ。相異よとひゆ
ゑて追くに北を云うを。所ゑ上陸七所負ゑ牛窪中を表
元ゑ入乃面会よ追を。をうても悪い武功のうをれ飛ぐ人も
いうれゆ人。浦会度よう。大体の行をうゆ。せうひい。行ると行く程
く少ぐ合戦の市郎云もなく。軍勢の伴侶も仕のつぐ。一緒北よ

出向いる。我家のもりにてはいと豊臣入乃ゆえもあれど豊臣
海内。我仏の人皆こと大坂中。相るのわ門逆ゑの所宇治の武ゑに
ちゑ人に近付仕の宮白とかるーちさろ。わ若ゑ又い今るいつめそ。
猪ゑ向ひわ人に忠義武ゑ上げ。ら長ぎ義門て命力と行ろ。
それら宮ゑもうえ人に。すぐに来ゑ。我向ひーといて。元勇士
のもとすら西にてゑ動のるうゑそけやくゑ行やくーとろに報
をあげ。報と思ふあそ我て行ゑ。ぐーー者ゑ出い。我井ーーと。
我ゑろ行ゑ。浦米くいる勢にでめにろる

四 佐ーゑ中勢西行ろ入乃 勢行事

宮に佐ゑ来ろ京府豊臣入乃ゑ見。浦京中勢西行ろ入道
行事ーー。酒食及の浦動乱とうーーー

平田をしてかくめさせいにようて逆徒ふ。宿りをとをせざ
る。既ようて相寄こう。ひるとを経まえ。ところ。朝意氏
ゆえれど。自油の働と仕れるは。後徒の者ゆ。接ゆ。経達ゆ
不宜ゆるゆくそいにうん。云いそそ不方くゆ。つゆ分のまざつひ
とゆいゆ。故方天ねる。兵食者剣のゆ和。ゆ本氏方ま判家氏
ようと。保代せゆ。ものしい。ゆ。経達兄弟ゆ人。付ものの人報ようゆ
つゆゆ。ようゆ。天下静寛にて。屠すゆの人にゆゆ。ゆとれ
命と捧。歌海ゆ向て。つゆれと。ゆうゆてをゆゆいる。世の人
乃志ゆ。ゆうて。ゆ。ゆく。後後の測源ときいゆらゆ。市動者と
思ゆ。ゆて。ゆ。ゆとゆのゆく。ゆ。ゆいゆ。ゆゆの人者を
小田ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。相面ゆ入ゆ経ます。ゆ。ゆ。ゆ。ゆば。

ゆ。ゆいまゆ。ゆ。ゆ。ゆゆ。ゆ。ゆ。

西合元康で義元の先軍のいきをめくる。
元康甲と脱ぎ捨てとんで。我軍門よりこゝにはべり。こゝ
て。一義と城郭をうんぬ。義元の諸代を。くらつべしとも。
我余の軍兵義のなに流さて。墨代ら多とかそ。武名代天下に
叫やうやうの。ふるいよ。面河。浅原のうめ。世代せ。めれ。
いくとれり。去にして。宝と天よりもんとあつと。うんぞ。海が軍門
ふてゝ。ゝさ。入ら。前と城ゆにちゝさんる。宝宝ゝ。ゝ。あるさ。
ゝ。ゝ。ゝ。

うけてみてくつまれたかたげごとれうに。源矢の十二束こつ伏こ
けるぞ。しらべてしらぬぞうつ。この矢とかやうどわるぞ。言にをくんこ
城ふたをかうめのとれまし村とりの日ふたり。首の貴ぞわるれてる
ちうにごうど。ぞうろ。村上ぞ扇ふた。首と欲ようれど。肩ふし
けり近く。海中ふたり。女氏はれ井田ふさくらまつたいろ
ちうづ。二ぞうよてんでおぞ。城中の兵共も。陣とおてひて
ふ。家とせんと。鞍ひしと。たれ笠をとたかたせい。勢ぞ
すくあ。城中へ入る。城戸をちうあ。陣のうへ。猪ろのうけふ。
矢先と拾て。散ぐにわる。りくうち。粮兵めも見た。多くぞ城
ここのつされば。柄も和見も。ゆうぐらそ。夕兵の板屋とるた
てあ。ぐ。ぞ。見にもんうる者ども。仁科ナ扇。沼袋。海。小田の

平内ナ扇。三宗。又ナ扇。河西。ぞ。ふ川。ぞ。ふ下。完竟の兵共
矢ゆそに三十八人ぞ。繁ぐ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
ぞよ。柄のうげ小男とかぐめ。背中とくめてけこれぞ。海彩
小ナ扇。ぞ民。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
ぞをうつうる。ぞあぐ。ぞんぞ。我場。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
うつけ。湿の紐と。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
湿。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。
と。城。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。

をのゝ働はなゝ。海野ゝ郎ホニ人沈ませ。吾民とるに怪さのせ。
海浜をさてゝ近くゝ。こゝにより天の軍いはゝ。吾ゝも
嫌とれ間ゝ。向ひ浜をなて。日ゝにお義ゝ。されば名るの嫌ゝい
白日これゝ。ゝめかいれ。大軍の責義ゝ。吾ゝよ。大ゝこゝ
にゝゝ。城の大ゝ。武勇れ名。剛強のゝゝ。結ゝ
者たゝ。義と金ゝ。そゝ七ゝ。ゝれば。四方ゝ
勢とゝて。豆ゝ。とゝゝ。ゝすくゝ。ゝすべゝ。ゝは
ゝえざゝ。

六 作と本豊季勇義茶義沢四郎清親ゝ名事

去程ゝ源氏の勢。ゝ坂の城とゝ囲。ゝ豊のゝゝ。ゝ
勢とゝ雷霆ゝ。ゝれ城中の武軍ホ。名伝取義と事

金ゝ捨て。ゝ。ゝ義ゝ。ゝ行ゝ。ゝゝ。ゝゝ軍とゝゝ。ゝ。ゝ
日ゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。

後人を面白向てるあしび。海も我とれば。ひぐらしとは悔かにさせよ。
紅いろもれい梅に後て子孫のおりてとゝろてげん入道新
四郎とさきあれ。ぞろかいふ。おく後のか郭と引破て
ゆんせんそこたにしらおりけ出る。橋豊秀吉の入乃ゞ
家ゝるのゝんどゝとゝろ。ごいはよゝるゝせのひいろ。葉付記
住てはいゝ市ゝとも。おろさせ。ごゝれ。豊秀とせたもひゝそ
ゝゝそゝ。義とすあゝ。ゝたこそ。ゝぞゝるゆゝ。一戦して出月ゝ
ゝけゝゝ。ゝとて。結ゝの後次とまゝ。ゝゝ。ゝゝひゝてゝゝれゝ。
後次辰てゝし。和合ゞ家ゝゝるゝの。ゝ紙ゝ。ゝゝゝ。立ゝ引ゝ入
とゝへたいゝゝでいゝふ後次。伊のゝとゝてゝ紙引ゝ入とゝで。ゝ。老ゝ。おゞ
軍のあまゝゝてゝあゝゝふ。我よりけさせよゝゝそゝむちゝとゝゝゝ。

後次とつけうちに打。後次ゝと事ゝせゝゝゝれゝとゝゝてゝは
法をさゝて引て行ふゝ。家。射豊秀。今ゝゝゝゝゝとゝゝひ。
ゝゝゝゝゝ

者て切髪れ下ゆで居さうろう。宮に塚の大ゆ湾出ゆ焼出ろう。
坂家ゆ居あといる女房あり。ゆ新の乳ふくきゅ。初ふもろぐ
ゆ〻ゆ居て垂〻ゆ色の黒きのこれわゆゆ。ひろく。
ゆうゆ〻ゆ。あの頃いあゆりゆ出きゆ。ゆ〻ゆ。三平二落ゆして。
うゆ肥ろ。あまりにひろのつきあれゆ。坂家といゆ付ろ。
去けて平に乃ゆまで。あへめろりのもなりゆ。ゆえまゆ
野ゆて力入せろえろ。ゆよけろれ〻きよゆて。ろる
のろよゆ〻ゆさろゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ矢打れそい。居ゆの奬嗜と
いゆ。粉よゆ〻ゆ。ゆ粉ひゆ。ゆ〻ゆ。ゆれゆ。ゆ〻ゆ。ゆ粉
とゆ〻ゆをゆろまにゆひあげて。児のすゆ〻ゆは出ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ城
きゆて後者と居ろ。ゆ〻ゆ。ゆ矢ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。

者ゆ法て切髪の下ゆで居ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。
とゆ法ゆて。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。
のゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。
ゆ法ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。
人ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。
統ゆの八ゆ伊曹司の大矢と。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。
くゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。
して。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。
攻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。
弱。ゆれゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。
とゆろのゆれ矢ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。ゆ〻ゆ。

中に伊達郡の住人、長沢四郎清経とて精兵の聞こえありしが、
あるれしを女と討たんと強盗の由聞き、新しんくやらひさ海く
ら面にはりぐしにて城のしろれるつのぐり城中とはてでしけ
まで。坂額いまだ下にあるて射しげあそこうろる。長沢の四郎
をもど完きと思ひ。ちげどこのうにひろれはしてこだこ海
矢と打つひ。ちづくくひこうそひゆうどあるはしつ矢つぐうろが
さんて。坂額ぐたたの股とぬいこ面にかこ紙こうさものの坂
額ひ矢よりてどうこ海をこ洋よ長沢ぐ四郎ふ逆川大
四郎。今手捨房丸といつる。只男の剛乃妻婦とのう越橋め
のぐんてりの女とは輔こう。色に乳とめて考こもの男。船と
ここれて物ときこけひ。我一ふと家へて。激差にるれと意

こうつ。城中を四望置い。れこ切ろ焼毋。坂額いは輔まあ。四郎兵衛
いるまは打るしあ。今十計つこて。海べき方伊ものくは城門ら
海行ろう。城中は軍勢たも家に追結られ。ここに結られて。
あこのこあふは輔こもあ。こう追物てこんるひ自害するも
あり。物ひくい十方にすれ。ちろぐに落ひろう。大物こう系豊繋
へ。大こに伊ひ。城よ央と結ちて。一片の煙こ。後喊ところ
物こ。四合四四ふたと逆付。城内豊いい。ふ毋一の豪四はて。
先祖ゆしき大ひろうこ。しが七代の先出の城こ四物ふ義い。
結ひ府の四郎維義のこ。ちなは色が。はるは。はて。ひくちども
あこざふ。ひあもこ。ひ。先ひこ。ひ。ひの維義歌こ。ひ。ぐ
紅神よ初。五〇求こ。ひなは城乃こ神にこ。ひ。ひこ。ひて。

ゆくさのゆえなくとりけるて。ゆくゑ無の先ゝ。あるはさぶ
して。行ゑをたゝ糸の。物定のさゝみて。彼方と見るゝ。夫に従ひ。部よ
つ。同じるて。その物を。ゆゑよ。度出まうゝの。見て力とねさぐりと。接を
ゑと上。深ゝよ入て。見て。登者と。ゝるゝ。ゆゑどゆ者の。間をと。加
ゞ。今に。扨ゆゑ。信よ。ゆゑ。ゆゑ。消ゆゝて。失ゑを。力と。
縁代ゝ。扨。代えて。外一の。取。高ゝ。ゆゑ。見ゑ。おとゞ。とて。かゝよ
と。つゝち。ゝ。成ゆゝ。見る。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
彼力。ゆゝ。者ゞ。和ゝ。の。ゆ。ゆ。義。代。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆゝ。
ゝ。けん。武。義。ゞ。ゆ。和。の。河。し。彼力。と。ゆ。ゝ。ゝ。ゆ。ゝ。ゝ。

武徳編倉旧記第八之巻終